

# 竹所の景観統一の一環として 外部に開かれた牛小屋再生

.....竹所夢プラン【新潟県十日町市】



## 団体設立経緯

設立年月	..... 2008年3月
メンバー数	..... 17人
代表者名	..... 五十嵐 富夫(いがらし・とみお)
連絡先	〒942-1356 新潟県十日町市竹所5555
メールアドレス	Igarashi.tomio@sea.plala.or.jp
<団体のミッション>	
私たちは、竹所集落の活性化、環境・景観の保全を行なながら、移住定住の促進を目的としたPR活動を行っています。	

約20年前、ドイツ人建築デザイナーのカールベンクス氏が竹所集落を訪れ、集落内にあった古民家を改修して住み始めました。過疎化に悩み、集落の存続の危機にあった住民にとって、廃屋同然だった集落内の古民家をよみがえらせたことはとても衝撃的でした。また、ベンクス氏の前向きな気持ちに刺激を受け、自分たちの住む環境は自分たちで良くしなくてはいけないと集落住民が主体となり「竹所夢プラン」を立ち上げました。

## 地域概要

竹所集落は、棚田や大地の芸術祭でも知られている新潟県十日町市の西側に位置し、日本有数の豪雪地帯です。春はブナの新緑、夏はホタル、秋は紅葉、冬は雪景色と四季の変化を感じることができる集落で、最盛期には38軒いましたが現在は十数軒の住宅が点在する小さな集落です。しかし住人の過半数を移住者が占め、市が運営するシェアハウスがあるなど限界集落を脱した集落です。また、カールベンクスさんの手掛けた建物が8軒あり、少し変わった建物があることから県内外から見学に訪れる方が多い集落です。

## 活動に至った背景や理由

10年前の設立時の全体の構想の中でこの牛小屋の計画がありました。集落入口にある牛小屋ですが、老朽化が激しく集落を訪れる方の第一印象が少し寂しいものでした。今までの活動の中で行ってきた集落内の給水所「竹水(ちくすい)」の整備やイベント広場づくりなどは、集落全体のものでしたので比較的実行しやすかったのですが、牛小屋は個人所有の建物ということもあり、持ち主、集落全体で慎重に話し合い今回の活動に踏み切りました。



改修前の牛小屋



設立当初のイメージ図

## 活動内容と成果

### 改修計画

竹所集落には、カールベンクスさんの再生した古民家が8軒あります。今回の活動の重要なポイントとして、集落内の景観の統一がありました。8軒の再生古民家は、白、ピンク、ベンガラ色、緑、黄色と様々な色があります。今回の牛小屋は、集落に入って一番最初に目に入ってくる建物です。当初のデザイン案は、白系の色でした。ベンクスさんと打合せを行い、外壁はオレンジに、付柱、付梁は濃い緑色に決定しました。壁のオレンジは過去に塗ったことのある色でしたが、付柱、付梁の濃い緑色は今回初めて挑戦した色になります。完成がどのようなものになるのかとても楽しみな反面、緑色の柱ということに少し不安もありました。また、予算との都合上、今回の助成金での改修は、建物の4面の改修が困難なことがわかりました。そこで道路から見える3面のみの改修を今回行うこととしました。

### 最も気を使うところ

工事を行う上で最も注意しなくてはいけない点は、牛という動物が小屋の中にいながらの改修ということでした。牛にストレスをできるだけ与えないように打合せを行い、2点のことを決定しました。まず、当初既存外壁を解体しての改修でしたが、解体時の音の問題と解体後に外壁がない状態が続くこと。また、下地の鉄骨の状態が予想していたよりも良いことから、外壁は解体せずにその上から新しく外壁を張ることに決定しました。そして、工事中もできるだけ電動工具の音が牛のストレスにならないように、同時に数台使用することは避け、役割分担と持ち込む電動工具を限定して工事を行うことにしました。出入口、窓については風通し、使い勝手から今までの位置、大きさを変えないようにという持ち主の希望があり、変更や追加はしないことに決定しました。地域柄降雪時の工事は不可能なので、10月末までという与えられた日数よりも少し短い期間ですが、外部の柵まで完成させて牛を一度は外に出すことを目標に、工事を進めることにしました。

### 改修工事

私たちの団体は、仕事を持っているメンバーがほとんどで、今回の改修にあたり平日に作業できるメンバーは限られしていました。建物が大きい為平日に作業ができないことは、冬前に完成させることを目標にした私たちにとって大変深刻な問題でした。

竹所集落では、田舎体験などをして1か月から1年の間で実際生活をしてみるインターン生を受け入れています。そこで、今回もこの牛小屋の改修に手を貸してくれるインターン生を募集し、女性1名が竹所に来てくれることになりました。集落センターに泊まり込み、各家庭での農業体験などに加え改修の手伝いも行ってくれました。建物の改修経験は全くないとはいって塗装作業等できる範囲で手伝ってもらい、大変大きな力となりました。インターンの研修期間が終了してからも友達を連れてスキーに来たり、各種イベントにも来てくれる等、今でも集落との交流が続いている。また、地元の左官屋さんが足場を貸してくれるなど、地元の方々の協力もありました。この改修を通じて人ととのつながりが深まり、新たなつながりができたことも一つの成果だと感じました。

改修は、建物の壁1面ずつ行っています。足場を組み、セメント系の外壁を張っていきます。壁と壁のつなぎ目が付柱、付梁の位置に来るようになります。そうすることで、外壁に余計な縫隙が出来なくなり塗装作業がしやすくなります。外壁を張ったら付柱、付梁の取付です。この木材はあらかじめ塗装をしておき、取り付けます。最後に壁のオレンジ色を塗装して次の面に移ります。この作業を3面繰り返します。外壁材が重く最上部まで上げるのに苦労しました。

改修中子供たちも現場を訪れ塗装作業を手伝ったり、牛や牛小屋に住み着いた猫と触れ合うことができました。



68



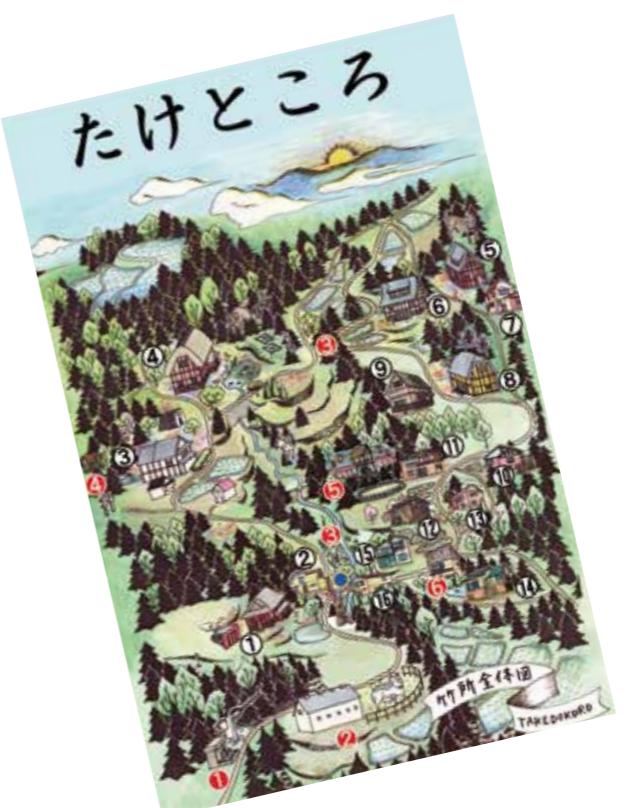
69



また、改修中に牛が出産をし、出産が夜だったので立ち会うことはできませんでしたが、生まれたばかりの子牛を見るなどできました。しかし、出産後母親が立つことができなくなってしまい、子牛に母乳を与えられなくなり、結果的に二匹とも亡くなってしまう残念な出来事もありました。身近に起きた出来事に子供たちばかりでなく大人たちも、改めて命の大切さを教えられることとなりました。その他、改修中に子供たちは実際に牛に餌をあげたり、触ったりと普段あまり経験できない体験をすることができました。改修の本来の目的である動物とのふれあいが、完成前にすでにできたことはとても大きな成果でした。

今年は晴れの日が多く天候にも恵まれ、改修も順調に進みました。塗装により色が着き始めると、集落を訪れる人たちからも何ができるのかと質問されることが多くなりました。トタンで覆われた明り取りの窓もガラスではなく透明なアクリル板に交換し、入口のブルーシートの雨よけの屋根も木製の緑色の屋根に変わり、最後の足場が外れ、柵も

作られました。柵は、私たちが予想していたよりも細く頼りないように思いましたが、飼い主の話ではそこに柵があることが認識できれば牛は逃げたりはしないそうです。秋、集落内で行う1月の賽の神の時に使う萱刈りの後、いよいよ牛を牛小屋の外に出すことになりました。牛小屋の改修も今回の活動の目的ですが、常に牛小屋の中にいた牛たちを外に出し触れ合えるようにすることが、今回の活動の一番の目的でした。人がいるなかで突然外に牛を出すことは、ストレスにもなり牛が嫌がって出ないかもしれませんという飼い主の話でしたので、正直みんな心配でした。やはり、牛小屋の出口の前で止まって中々出てきませんでした。しかしうやく一頭が外に出てきました。はじめ柵の中で放し飼いにはせず、柵につなぎましたが何とか外に出すことができました。外で見る牛に子供たちも大変喜んでいました。慣れるまでは、短い時間で少しづつ外に出し、最終的には牛が自由に入り出するようになれば、本当の意味での今回の活動が成功したといえるでしょう。



竹所集落は、再生古民家を見たり再生古民家のカフェを利用する人たちが頻繁に訪れます。今回の活動終了後、彼らから「あの建物は何ですか?」「あれがシェアハウスですか?」等、私たちが予想していた以上のリアクションがありました。今回の活動は、大成功に終わりました。

## 課題と解決策

今回の活動の中での最大の課題は、常に現場で作業する人が少なかったことです。幸い天候に恵まれ降雪時期も遅かったので完成しましたが、雨が多い年だった場合、やはりもう少し人が必要だったと感じました。ワークショップのような形で広く声を掛けければ、学生等平日でも作業ができる人が集まつたのではないかと思います。また、作業中も動物に触れあう機会があったことは、予想していませんでした。ですから地元保育園の園児、小学校の生徒などにも声を掛け、作業風景を見たり、牛と触れ合ったりしてもらうことができました。このことは直接作業の工程には関係ありませんが、子供たちにとっては良い勉強になったと感じました。

## 今後の予定

今回の改修を行ったことで、牛を外に出せるようになりました。動物がいる環境、触れ合える環境は中々あるものではありません。今後は身近に動物と触れ合える環境づくりを目指し、以前と変わらない環境づくり、また今回できなかった牛小屋の1面の改修、竹所夢プランの目標である集落センターとポンプ小屋の改修ができるように、活動していくたいと思います。そして、10年前の設立時に目指した計画が完成することを最終目標に、皆で力を合わせていきたいと思います。